



色語り

～緑～

ぱたぱた、と、白い指先が色を変えていく。盤の上につむくたびに、さらりと黒髪が落ちくる。私の顔を見ては、にこりと紅い唇が笑う。あなたは様々な色を持っている。

「何見てるの」

あなたが黒髪を白い指先で耳にかけ、紅い唇で問いかける。私は正直に答える。

「あなた」

「なんで」

「きれいだから」

「気味悪い。きれいって、私の何色が」

賛辞を意地悪に突き放され、私はむっとする。ふふふっと笑うあなたの唇の紅みに、ほんのりと影がさす。

遠く隔たった場所の喧噪が、私の部屋からも聞こえていた。騒ぎはますます高じているようだ。甲高いかんかんという音が、定期的に打ち鳴らされているのだ。きっとあの音は火花を散らし、濃紺の夜空に跳ね返り響いているのだろう。

けれど目の前のあなたは、そんな外界の騒々しさなど聞こえないのか、まるで表情を変えない。その白い肌の内側に到達する前に、あなたにとって不要なものは、濾過され、淘汰されてしまうのかしら。

「ぼけっとしない」

あなたが突然口を開く。私ははっと盤を見る。いつの間にか、彼女の色である黒が優勢になっていた。私の白い色が彼女の黒にねじ伏せられている。

「ぼけっとしてるから。ゲームはなんでも最後まで気を抜いちゃダメ。必ず勝つ方法教えてあげましょうか。ラストを想像するの。自分が勝った姿を強く強く念じる。だから私はこのゲームをする時は、自分の色で盤を埋め尽くしている光景を想像する。今ならそう、黒ね。黒い色が、この盤を埋め尽くしてる」

そう言いながら、彼女の指先が、はたはたと、白くて丸い駒を黒に帰していく。

「だから私はこのゲームが好き。だって勝敗の結果が美しい模様になって現れる。白と黒という色彩も素敵。うるさくないわ」

遠い空の下で、またあの甲高い音がかんかんと鳴った。あなたは音を払うかのように、黒髪をかき上げ、耳にかける。それから声を軽い旋律に乗せ、つぶやいた。

「母様が、天に召されて、十二の月が昇りました」

私はどきりとする。彼女の母親であり、私の伯母でもある翠の一周忌の法要が、つい先日あったばかりだ。

「母様、天の棲みかはいかほどか、寒くはないか寂しくないか」

またかんかんという音が聞こえてくる。ああ耳障り。私はこの従姉妹の声をもっと聞いていたいのだ。

「ねえ、知ってる」

すると急にあなたの声が低くなった。私はあなたを見る。

「嘘の見抜き方」

あなたより無知な私が、知るわけがない。

「人ってね、嘘をつくと、色が変わるのよ。ここが緑色になる」

そう言ってあなたはべえっと舌を出した。私はじっとそのピンク色の表面を見た。

「嘘だと思ってる？ でも今、私の舌の色は変わってないでしょ。嘘じゃないからよ。試してみる？ ねえ、何か嘘をついてみて」

「えっ？」

「なんでもいいわ。嘘ついて」

盤越しに、あなたが顔を近付けてくる。甘い吐息が唇にかかる。

「ねえ。なんでもいい」

私は懸命に考える。嘘というものを。

「あ、あなたが」

「うん」

「嫌い」

「素敵。素敵な嘘」

言いながらあなたの舌が私の唇を舐めた。感触にぞくりと目を閉じる。

「もっと言って」

「こんなの、気持ち、よくない」

「ふふふ。素敵」

唇が重ねられた。私の左腕にあなたの右の指が触れる。私もあなたの左手を、そっと探る。黒白の様子が浮き上がった盤の上で、互いの舌が、互いの唇の中を行き交う。

つと、あなたの唇が私から離れた。

「じゃあ、私がこれから言うことは、真実かしら。嘘かしら」

かんかん、と高い音は鳴り続けている。

あなたの言葉が、私の中に注がれる。

「私の母様は殺された」

「……誰に？」

けれど私の疑問は、再び降ってきた口付けに封じられた。彼女がにっと笑った気配がした。

「ねえ。あなたの母様にこう聞いたら、なんて答えるかしら。『ねえ叔母様、ミドリの舌は嫌い？』」

ミドリとは、緑なのか翠なのか。

あなたが私から顔を離して言う。

「舌を見せて」

私は素直に舌を出す。

「ほら。嘘をついたから、緑色になってる。自分じゃ分からない？ でもちゃんとなってるわ、あとで鏡を見るといい」

じゃ、あなたのも見せて、と言いかけた私の唇を、柔らかくあなたの唇が塞いだ。

「じゃあもう一つ。これは真実か嘘か。当ててみて」

声が口腔の中に沁み渡る。

「私は私の家に、火をつけていない」

家。言われてから、ぼんやりと思い出す。

今夜は私の母が、彼女の家に行っている。法事の後始末という用件で。彼女の父が一人待っている、彼女の家に――

反射的に彼女から離れた。彼女がにいと笑う。照明を背に、陰になった口元から覗いた舌は、暗い色をしていた。

かんかん、とまた音が鳴る。サイレンだ。私はやっと気付く。

あなたが口付けてくる。私の視界は、すべてが大写しの、混濁した色になる。口付けはいつもより、苦い。あなたがささやく。

「私も、あなたが、好き」

色は見えない。

けれど視界の隅にあるゲーム盤は、真っ黒に埋め尽くされて見えていた。

(了)